

外貨準備の通貨構成が語ること

2013 年第四四半期の世界の外貨準備の通貨構成が明らかになった。(IMF)
そこから読み取れることは以下のとおりだ。

1. ドルの割合(61.2%)の長期低減傾向は継続しているが、前期に比べ絶対額も減少した。割合は減少しても絶対額は増加してきたこれまでのパターンに変化が生じた。これは新興国のドル保有の減少を反映したものだ。この理由としては二つ考えられる。一つは FED のテイパリングによる通貨安を抑制するためのドル売り介入、もう一つはウクライナ情勢の悪化を見込んで、ドルからのシフトが進められたことだ。
2. ユーロが前期よりも割合(24.5%)も絶対値も増加した。ユーロ危機前の割合には戻っていないものの、減少傾向は増加傾向に完全に転じた。ドルからのシフトの受け皿として役割が復活したと見ていい。
3. ポンドと円の割合(4%、3.9%)は、前期にポンドが円をわずかに上回るようになったが、この傾向は第四四半期も続いた。これは、先進国では円の保有が上回るものの、新興国でのポンド保有の高さが影響している。
4. オージーとカナダドル(1.6%、1.7%)の伸びは前期比で頭打ちになった。
5. 新興国での外貨準備高は増加しているが、これは中国の増加による。他の新興国では 13 年の第二四半期と第四四半期で減少している。これはテイパリングが引き起こした通貨安を抑制するためのドル売り介入による。
6. 中国は通貨構成を明らかにしていないが、米国のロシアに対する対抗措置のカードに資産凍結、ドル決済の抑止などが含まれる以上、ドル依存のリスクをあらためて認識したと考えられる。そこで中国のドル離れも進むと考えられる。中国が目指す米国との大国関係もドル依存体制のままでは基本的に成立しないのだ。